様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２０３６

研究課題名（和文）性同一性障害とスポーツ　～治療に伴う運動能力変化と競技スポーツへの参加～

研究課題名（英文）Sports for Transgender People; Changes in physical strength associated with treatment and Participation in competitive sports

研究代表者
関　明穂（SEKI, Akiho）

岡山大学・保健学研究科・客員研究員

研究者番号：２０３１４６８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：市民レベルでのスポーツに関して、トランスジェンダーの受け入れ状況と問題点の調査を行った。その結果、トイレや更衣室などの施設面の問題とともに、競技スポーツについては競技の公平性の確保の問題が指摘された。
施設面の問題は多目的トイレの使用などにより対応が可能である。競技の公平性については、トップアスリートに対しては競技参加規定が作成されている。これに対し、市民レベルでの競技会では、多様性の尊重の観点から参加に制限は設けないこと、と同時に、競技の公平性の観点からトランスジェンダーの選手が上位に入賞する記録を出すなどの際に限って、特例的な対応を行うことが現実的であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
トランスジェンダーに対する一般市民の理解は一定程度進んできているところではあるが、スポーツへの参加については競技の公平性の観点などからの課題も存在する。そこで、一般市民レベルのスポーツへのトランスジェンダーの参加について、現状と問題点を明らかにするとともに、多様性の尊重と競技の公平性の観点から、どのような対応が可能であるかについて検討を加えた。

研究成果の概要（英文）：We conducted surveys on the status and problems of acceptance of transgender people in sports at the citizen level. As a result, problems with facilities such as toilets and changing rooms were pointed out, and problems with ensuring fairness in competitive sports were pointed out.
Problems with facilities can be dealt with by using multi-purpose toilets, etc. Regarding the fairness of the competition, there are regulations for participation of transgender for top level athletes. On the other hand, in competitions at the citizen level, it is desirable that there are no restrictions on participation from the perspective of respecting diversity. At the same time, from the perspective of fairness in the competition, it was considered realistic to make an exception only when transgender athletes set a record of winning in the top ranks.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：トランスジェンダー　競技スポーツ　生涯スポーツ　性別違和　性同一性障害

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

我が国において性別違和（性同一性障害）に対する医療が正規のものとして行われ始めたのが1998 年である。性別違和（性同一性障害）に対する診療が開始された当初は、性別違和（性同一性障害）や同性愛なども含めた LGBTQs についての正しい知識と理解を広め、偏見や差別を解消していく取り組みが必要であった。そこで、我々の研究グループでも、社会生活の中で最も基本となる学校や職場での理解と受け入れについての調査、研究を、科学研究費補助金を受けて「性同一性障害当事者に対する社会の対応～その現状と当事者と考える支援策～」（基盤研究 C、2011～2013 年度、研究課題番号 23510358）などとして行い、その結果を一般市民への啓発用の小冊子としてまとめるなどした。

その後、2015 年に文部科学省から「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」の通知が出されるなど、教育機関や一般社会での理解と受け入れは徐々に進んできている。もちろん、LGBTQs に対する偏見や差別がなくなってしまったわけではなく、これからも偏見、差別の解消に向けた取り組みを続けていく必要がある。と同時に、今後は学校や職場以外の日常生活のなかでの性別違和（性同一性障害）やトランスジェンダーへの対応、受容についても注視し、検討していくことが望まれる。

そこで、体格や筋肉量の差を背景として男女が明確に区分されるスポーツの場を対象として、性別違和（性同一性障害）やトランスジェンダーへの対応、受容について調査、研究を行うこととした。

２．研究の目的

(1) スポーツ施設やスポーツ大会での性別違和（性同一性障害）やトランスジェンダー当事者の受入れ状況を調査するとともに、受入れに際してどのような問題が想定されるかについて確認する。また、一般の人が性別違和（性同一性障害）で性別移行した人の競技スポーツ参加をどう考えているかについての調査も行うことにより、性同一性障害当事者のスポーツ参加における現状と問題点を明確にする。

(2) ホルモン療法や手術療法に伴って、体力、運動能力が移行しようとする性別のそれにどの程度近づくのかを調査し、性別移行後の性別として競技スポーツに参加するための基本的条件を確認する。

(3) 性別違和(性同一性障害)やトランスジェンダーの当事者のスポーツ参加の現状把握を行う。

(4) 以上の研究結果を総合して、一般市民レベルでのスポーツについてのトランスジェンダーへの対応の実態を明らかにするとともに、どのように受け入れるのが望ましいのかを明確にする。

３．研究の方法

(1) 性同一性障害当事者のスポーツ参加における現状と問題点を明確にするために、以下の調査、研究を行った。

①生涯スポーツの場でのトランスジェンダー受け入れの現状と課題を明らかにするために、健康運動施設に対して質問紙調査を行った。

②市民レベルでの競技スポーツの場での受け入れの現状と課題を明らかにするために、マラソン大会に着目し、マラソン大会主催者に対して質問紙調査を行った。

③2021 年に開催された東京オリンピックに、男性から女性へと性別移行したトランスジェンダーの女性選手が出場した。この出場に対するインターネット上での言説を収集、分析し、一般の人がトランスジェンダーの競技スポーツ参加をどう考えているかについて検討した。

(2) トランスジェンダーが競技スポーツに参加するための基本的条件を確認するために、以下の調査、研究を行った。

①健康運動施設での体力測定の結果を男女別に比較、分析した。また、一般市民が参加するマラソン大会での男女別の記録を比較、分析した。

②国際オリンピック委員会および国際競技連盟のトランスジェンダーの競技参加に関する規定についての情報収集を行った。

③ホルモン療法中および手術療法後の性別違和（性同一性障害）当事者に協力を依頼し、体力・運動能力の測定を行った。

(3) 上記(2)③の調査協力者にスポーツ参加状況について聞き取り調査を行った。

(4) 以上の調査、研究の結果をもとに、一般市民レベルの生涯スポーツ、競技スポーツへ性別違和（性同一性障害）やトランスジェンダーの当事者が参加するうえでの課題と受け入れのあり方について検討を行った。また、その結果を一般市民へ向けた啓発用の小冊子としてまとめた。

４．研究成果

(1) ①全国の健康運動施設を対象とした質問紙調査を実施し、181 施設（回収率 38%）から回答を

得た。「性同一性障害の人から施設利用について問い合わせがあった場合の対応」としては、「本人の状況などを確かめて個別に判断する」との回答が約6割を占めた。また、「トイレや更衣室等の使用についてトラブルになる可能性が一般の利用者と比べて高いと思う」との回答が7割弱認められた。このような男女別に分かれる設備の利用については、これまでにも学校や職場での性別違和（性同一性障害）やトランスジェンダーの受け入れに際して課題として挙げられてきたものであるが、多目的トイレや個室の使用などにより対応しうるものである。今回の調査でも、「現在、あるいは以前に性同一性障害の人の利用があった」施設が27施設（15%）あり、「多目的トイレ等を活用することにより問題なく運動施設を利用していただけた」との自由記述コメントも認められた。

②全国で開催されたマラソン大会の主催者を対象とした質問紙調査を実施し、449 大会（回収率47%）から回答を得、そのうち参加者のタイムを計測し、順位づけを行っている395大会について分析を行った。「性同一性障害・トランスジェンダーの人がマラソン大会に参加する場合に問題が生じる可能性があること」として、約8割が「更衣室」を、約6割が「トイレ」「上位入賞時の扱い」「男女どちらのカテゴリーで参加するか」と回答していた。「トイレ」「更衣室」については(1)①で述べたように多目的トイレ等の利用で対応可能と考えられる。しかし、マラソンは競技スポーツであるため、トランスジェンダーの参加者の記録、順位の取り扱いが問題と考えられていた。

一方、「もし性同一性障害・トランスジェンダーの人から『男女どちらのカテゴリーで参加可能か』との問い合わせがあった場合にどう回答するか」を聞いたところ、「本人の申告する性別で参加してもらう」が約4割で最も多く、次いで「その人の状況に応じて判断する」「戸籍上の性別で参加してもらう」の順であった。今回の調査では、参加者があらかじめ問い合わせがあった場合の対応を尋ねたが、市民スポーツレベルの競技会では参加者の性別、年齢などを書類で確認することは多くない。このため、トランスジェンダーの参加者が事前に問い合わせを行わずに参加申し込みをした場合には、実質的に本人の申告する性別で参加することになるものと推測される。このことは多様性に配慮し、参加者本人の性自認を尊重するという人権擁護の視点からは不都合のないものと考えられるものの、競技の公平性を確保するための何らかの方策は必要と思われた。

③2021 年に開催された東京オリンピックにトランスジェンダーの女性選手が出場したことに関するネット上での言説の収集、分析を行った。肯定的な意見としては、「このトランス女性の参加は、スポーツにおいて性の多様性を認めることの象徴であり、本人の性自認が尊重された結果として当然のことである」などがあった。一方で、否定的な意見として、「トランス女性の女性競技への参加は女性アスリートにとって不公平であり、脅威である」と主張する批判も数多く認められた。なお、今回の出場は国際オリンピック委員会などのルールに従ったものであったが、このルール自体が競技の公平性の観点から適切とは言えないとの批判も多かった。

(2)①健康運動施設で計測されていた既存の体力測定の結果を男女別、年齢階級別に確認した。筋力に係る測定値は全体としては女性よりも男性の値のほうが高かったものの、個別の計測値については女性、男性の値が広い範囲で重なり合っていた。

また、一般市民が参加するマラソン大会の男女別の記録の比較、分析を行った。記録を確認したどの大会についても上位のタイムは男性が占めていた。しかし、各大会のフルマラソンで1位の女性選手よりも速いタイムを記録した男性選手は、男性選手全体の1～2%程度、10位の女性選手よりも早いタイムを記録した男性選手は2～4%程度であり、女性、男性のタイムは広い範囲で重なり合っていた。このことから、トップアスリートが出場する競技会ではなく、一般市民レベルでのマラソン大会であれば、トランス女性が参加したとしても、その参加者が女性のカテゴリーで上位入賞する可能性は高々数パーセント程度かそれ以下であろうと見積もられ、記録や順位が問題となることは実際には多くないものと推測された。ただし、上位入賞に匹敵する記録をトランス女性が出した場合の扱いについては、競技の公平性確保の観点から別途十分に検討しておくことは必要であろう。

②国際オリンピック委員会は2015年の規定で、トランス男性は条件なしで男性カテゴリーで競技することができる。トランス女性は血清テストステロンレベルが10nmol/L未満であることなどの条件を満たすことで女性カテゴリーで競技することができる、としていた。また、2021 年に開催された東京オリンピックにはこの規定に基づいてトランス女性の選手が出場した。しかし、この規定に対しては(1)③で述べたように競技の公平性を確保する上では十分なものではないとの批判もある。

2022 年には国際水泳連盟がトランス女性の出場要件を変更し、思春期以前から治療を開始していることを新たな要件として決定した。また、競技カテゴリーとして女性、男性に加えて、「オープン」カテゴリーの設置の検討が始められた。これらはトランス女性の女性カテゴリーへの出場をこれまでよりも狭め、競技の公平性により重きをおく動きであると考えられる。

なお、このような国際オリンピック委員会や国際競技連盟の示す参加基準を、市民レベルでの競技スポーツでの参加基準として用いることは、その確認を行うための手続きの煩雑さなどの理由から、困難であるものと考えられた。

③ホルモン療法中および手術療法後の性別違和（性同一性障害）当事者に協力を依頼し、体

力測定を行った。測定を行ったトランス女性の測定値は(2)①で述べた女性、男性の値が重なり合う範囲内にあった。ただ、研究協力者が十分に集まらず、また、新型コロナ感染症の蔓延に伴って協力を依頼することに支障が生じ、標本数を確保することができなかったため、集計、分析は行えなかった。

(3) 上記(2)③で述べたように、十分な数の調査協力者を得ることができなかったために、トランスジェンダーの当事者のスポーツ参加状況についての調査、分析は行うことができなかった。

(4) 以上の研究結果をもとに、性別違和（性同一性障害）やトランスジェンダーのスポーツ参加に係る現状と受容のあり方について、主に市民レベルでのスポーツ参加の視点からまとめた。トランスジェンダーのスポーツ参加については、主としてトイレや更衣室などの施設面での対応に関する課題と、トランス女性が女性カテゴリーで競技に参加した場合の、競技の公平性についての課題の 2 つの課題が存在した。このうち、施設面の課題に関しては、これまでも検討、対応がなされてきた学校や職場における対応と同様に、多目的トイレや個室の使用などにより対応が可能であろうと考えられた。と同時に、学校や職場での受容においても必要であった、LGBTQs に対する偏見、差別の解消に向けた一般市民を対象とした取り組みを続けていく必要があるものと考えられた。

一方、競技の公平性についての課題については、国際オリンピック委員会や国際競技連盟がトランスジェンダーの競技参加に係る規定を示している。しかし、国際オリンピック委員会の 2015 年の規定については競技の公平性確保するには十分なものではないとの批判があるとともに、国際水泳連盟が 2022 年に規定の変更を行ったように、現在のところ参加基準が確立しているとはいいがたい。また、国際オリンピック委員会や国際競技連盟の示すトップレベルのアスリートに係る競技参加基準を、市民レベルの競技スポーツでの参加基準としてそのまま用いることは難しいと考えられる。

市民レベルでの競技スポーツにおいては、競技の公平性の観点と同時に参加者本人の性自認を尊重するという人権擁護の観点も必要と考えられる。ここで、マラソン大会における男女別のタイムを検討した結果として、トランス女性が女性カテゴリーで参加したとしても、その選手が入賞するレベルのタイムを記録する可能性が高々数パーセント程度であると推測されることは重要である。競技の公平性を考えるうえで特に問題となる、上位入賞に匹敵する記録をトランス女性がつける可能性がそれほど高くないのであれば、市民レベルでの競技スポーツではトランス女性の女性カテゴリーでの参加を認める。ただし、上位入賞に匹敵する記録をつけた場合に限って、特例的な対応を行うことが現実的な対応方法の一つであるのではないかと考えられた。もちろん、このような対応が適切であるかについては、トランスジェンダーの当事者や競技参加者、一般市民の中での検討、受容が必要であろう。また、その他の対応方法についての検討も行われることが望まれる。

本研究を通して、トランスジェンダーのスポーツ参加の現状と受け入れのあり方について検討を行ってきた。これらの結果をまとめ、一般市民へ向けた啓発用の小冊子として「トランスジェンダーのスポーツ参加　多様性の尊重と公平性との間で」をまとめた。今後、引き続きこの小冊子などを用いて、LGBTQs に対する偏見、差別の解消とスポーツの場でのトランスジェンダーの受容に向けた一般市民を対象とした啓発活動を行っていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 関明穂、鈴木久雄、中塚幹也	４．巻 13
２．論文標題 マラソン大会におけるトランスジェンダーの参加カテゴリー　大会主催者による競技の公平性と性自認の尊重のバランス	５．発行年 2020年
３．雑誌名 GID（性同一性障害）学会雑誌	６．最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関　明穂	４．巻 47(8)
２．論文標題 「LGBT」の最新事情　知識とルール　基礎知識Q&A前編	５．発行年 2018年
３．雑誌名 「健」	６．最初と最後の頁 10-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関　明穂	４．巻 47(9)
２．論文標題 「LGBT」の最新事情　知識とルール　基礎知識Q&A後編	５．発行年 2018年
３．雑誌名 「健」	６．最初と最後の頁 46-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関　明穂	４．巻 46(1)
２．論文標題 「性同一性障害・性別違和などの子どもたちと向き合う先生へ」第9回　対応の幅を広げるには	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『健』	６．最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関　明穂	4．巻 46(2)
2．論文標題 「性同一性障害・性別違和などの子どもたちと向き合う先生へ」第10回　カミングアウト、する？しない？	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『健』	6．最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関　明穂	4．巻 46(3)
2．論文標題 「性同一性障害・性別違和などの子どもたちと向き合う先生へ」最終回　将来について相談されたら	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『健』	6．最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関　明穂	4．巻 64(8)
2．論文標題 「保健体育とLGBTを考える」LGBTの子どもたち　あなたのクラスも無視できない	5．発行年 2016年
3．雑誌名 体育科教育	6．最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関　明穂	4．巻 45(5)
2．論文標題 「性同一性障害・性別違和などの子どもたちと向き合う先生へ」性同一性障害とは	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『健』	6．最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関　明穂	4．巻 45(12)
2．論文標題 「性同一性障害・性別違和などの子どもたちと向き合う先生へ」水泳、部活、呼び方などは？	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『健』	6．最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 関明穂、鈴木久雄、中塚幹也
2．発表標題 マラソン大会におけるトランスジェンダーの参加カテゴリー
3．学会等名 第22回GID（性同一性障害）学会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　久雄 (Suzuki Hisao) (30135967)	岡山大学・全学教育・学生支援機構・特任教授 (15301)	
研究分担者	中塚　幹也 (Nakatsuka Mikiya) (40273990)	岡山大学・保健学域・教授 (15301)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関